

単語の切り出しも、単語の品詞の決定も、単語の意味も交差法で獲得できることが示されました。ただ、単語への意味の獲得は対訳文群の解析によるもの限定して議論しました。今回は、意味の獲得が生活の中で自然に行えることを示します。

人間は、ミラーニューロンによって、人の行動が自分の行動として見たとき何を意味しているかを把握できる能力を得ます。口を動かして、なにかを口に入れることを観察すると、「食べる」という自分の行為と同じであると判断するわけです。それは、自分の行動にも纏まった単位みたいなものがあり、「掴む」とか、「歩く」とか、そういう単位で行動を生得的に持っている、ミラーニューロンは、視覚イメージの相手の顔にその情報を貼り付けて解釈していると捉えることができます。これをコマンドと呼ぶことにしましょう。

また、顔とか、体とか、車だとか、塊と判断するものは一つの単位として知覚されます。これも生得的な能力です。これをオブジェクトと呼ぶことにしましょう。このコマンドとオブジェクトを音声記号である単語に割り付けることが、単語の意味の獲得です。

この意味に獲得を交差法で簡単に行えることを示します。話者と学習者が同じものをフォーカスして会話しなくても単語の割り振りがかのようなことを示します。

あるシーンにイスとテーブルがあったとします。教示者が「イスがあります」と言ったら、学習者は「イスとテーブルがあるシーン」をこの文にあてはめます。次のシーンでは、イスが動いていたとします。「イスが動いています」と教示者が言います。すると、学習者は、「イスがあって、テーブルがあって、イスが動いているシーン」をこの文にあてはめます。ここで、文の違いが学習者によって解析されます。「イス」と「テーブル」で両者の違いは、「イス」が動いていることです。文による違いも、「イス」と「あります」と「うごいています」です。これで、オブジェクトは「イス」が見えている動いたもので、「テーブル」は静止したものであることが推論できて、そのまま意味として獲得します。コマンドは「あります」とは静止の意味だということ、動いています」は歩くことだと推測します。

こうして、交差法によってすべての単語や慣用句が学習され、獲得されていくことが言えました。